

比較文化研究と英語教育のあいだ

——《レトリック》の視座から考える

吉田和久

はじめに

昨今のグローバル化や情報化の進展を背景にして、日本の英語教育の分野では、文法訳読式の教授法が批判され、オーラル・コミュニケーションを重視したメソッドが重視されるようになってきた。ところで、訳読なのかコミュニケーションなのか、というのは、日本の英語教育の世界では、実は古くから繰り返されてきた問いである⁽¹⁾。確かに、昨今のグローバル化や情報化はかつてないほどの規模で進行しつつあり、そのことが英語教育の改革を日本人に迫る最大の要因となっていることに間違いあるまい。ただ、社会情勢の変化が急激であるのに比して、英語教育に携わる人びとの議論は、従来のその蒸し返しに留まっているという感も否めない⁽²⁾。それは、日本人と英語という問題が、単なる技術論を越えた、近代日本の文化史に特有な事情と絡んだ難問だからであろう。この難問の解決に向けて、比較文化研究という視座から幾許かの努力をしてみたい。

この論文では、比較文化研究と英語教育の二つの領域を往復することによって、双方向的な議論を展開してみたい。比較文化研究が英語教育へ教えるものは何か？そしてまた逆に、英語（教育）学が比較文化研究へ示唆するものは

何か？

まず、比較文化研究から英語教育への方向。比較文化研究の成果を日本の英語教育に取り入れることで、『訳読』vs.『コミュニケーション』という、少なからず不毛な対立をいわば『脱臼』させる契機を見出せるのではないかと思われる。日本人が英語に対して取るべき姿勢は、訳読かコミュニケーションかの二者択一にあるのではない。訳読もコミュニケーションも、日本の英語教育の世界では共にイデオロギーとして働いてきたのであり、また、社会的な事情が要請するところに従って、それぞれに機能を果たしてきた、と見るべきなのである。

次に、英語（教育）学から比較文化研究への方向。日本の英語教育は相変わらずの迷走を続けているが、そうした動きとは独立して、英語学の領野では新しい知見が次々に開拓されている。私が関心を持つのは、認知意味論や関連性理論のようなアイデアである。こうした比較的新しい英語学の理論は、現代世界における文化的な多元性、あるいは、異文化間の交渉における寛容や通約性といった、比較文化研究が開拓しなくてはならないパラダイムに多くを教えてくれるように思われる。

一 現代における比較文化研究と英語教育——両者の相関性

議論の出発点として私が示唆したいのは、『比較文化研究』と『英語教育』とのあいだには或る種の相関性があるのではないか、ということである。両者はそれぞれに新旧の型を持ち、旧型は新型によって専ら批判を浴びている、というような点で似ているのではあるまいか。比較文化研究については、固有文化の類型モデルが時代の要請に合わないとは批判され、異文化間の相互交渉の局面に焦点を当てた、よりダイナミックな文化のモデルが模索されている。

英語教育をめぐることは、旧型としての訳読教育と新型としてのコミュニケーション重視の教育との対立がある。類型 vs. 相互交渉、訳読 vs. コミュニケーションという二つの対立関係の類似性は見紛うべくもあるまい。

まず、比較文化研究の新旧については、西川長夫の《静態型》と《動態型》の対比を借りて整理しておこう⁽³⁾。比較文化研究の《静態型》とは、国民性論、あるいは、国民性の比較論のようなものを指す。こうした文化論においては、「特定の集団【中略】に固有の特徴を取り出すこと」が企てられるが、「多くの場合、その特徴は伝統的なものであり」、「この集団に属する人びとは、そのような伝統に同一化しえたときに、はじめて安定した幸福感と生きがいを感じる」とされる⁽⁴⁾。しかしながら、こうした静態型の比較文化研究は容易に排外主義に転化しかねないことが何よりの問題である。なぜならば、国民性を比較するという作業は、一見したところでは、比較の対象である双方の文化を《対等》に扱うような素振りを見せているのだが、実のところ、この作業に隠れているのは、人種や文化のあいだに存在する不均衡を暗黙のうちに認める差別意識だからである。

《動態型》の比較文化研究は、《静態型》へのそうした批判をひっさげて登場してきた。それは具体的には、九〇年代に英米圏を中心に広範囲な影響を持ったポストコロニアリズムやカルチュラル・スタディーズのような社会的かつ政治的な文化批評の動向のことを指している。動態型は、「近代の文化とは近代の国民国家のイデオロギー装置である」という視座を強烈に打ち出し、文化現象を政治的な視点から見ることによって、様々な形で文化批判を展開した。それでは動態型は、静態型の批判の後に、何を指すのか？ 西川によれば、そこでは「純粹や伝統、画有性などが消えて、変容や交流、関係性などが強調され、独創性に代わって共通性や模倣の意味があらたに問われ」る、という。「共鳴や多元主義が新たな関心と呼び、アイデンティティは歴史的な過去へ向かうのではなく、未来の共同体への方向性をとる」とも彼は述べている⁽⁵⁾。つまり、文化を《独自性》や《差異》の観点からではなく《相互交渉

の位相において捉えるのが動態型の文化モデルの特徴である、とひとまずは言えよう。

現代日本の英語教育が抱えている難題の一つとして、『訳読』なのか、『コミュニケーション』なのか、という問いがある⁽⁶⁾。この難題に多くの日本人が悩まされていることについては、もはや多言は不要だろう。英語でのコミュニケーション能力は、社会の多くの場所でますます必要になってきている。それであっても、文法や訳読を軽視することには反対意見が強い。それならば、両者の共存を図ればよさそうなのだが、これまでは、なぜかそれが出来なかったし、これからも容易には出来そうにない。これはいったいどうしたことなのか？ これは、英語という言語、あるいは、英語教育という分野に特有の問題なのか、それとも、近代日本という特定の社会的・文化的な文脈に規定されたもののなのか？

ここで議論の発端としたいのは、比較文化研究の新旧のパラダイム——静態型と動態型——と、英語教育の新旧の形態——『訳読』と『コミュニケーション』——とのあいだには、或る種の相関関係があるのではないか、という最新の指摘である。

静態型の比較文化研究は、文化間に確固たる差異があることを前提とする。例えば、日本とアメリカの文化はそもそも異なっているものであり、異なっているからこそ、比較という視点が成立するのである。訳読とは、外国語と日本語との乖離を前提として、外国語で書かれたものを日本語へと変換する作業のことであろう。ここで人びとが自明のものとして抱えているのは、海で隔てられた双方の言語が動かないものとして存在しているイメージであろう。外国語と日本語は、語彙の点でも文法の点でも、そもそも全く異なるのであり、それゆえに翻訳が必要となるのである。二つの文化や言語の間に存在する乖離や差異を前提とする点で、静態型の比較文化研究と訳読は何ら変わるところがない発想法に立っている。

動態型の比較文化研究は、諸文化間の交流や摩擦などの現象に着目し、『相互交渉』という位相から文化を見ようとする。コミュニケーションを重視する英語教育が目指すのは、情報や文化の入超という従来のアンバランスの状態への反省に立ち、日本側から英語で情報なり意見なりを発信して、日本の外部との『相互交渉』を持つことである。この『相互交渉』という局面において、両者の同質性を見て取れよう。そして、比較文化研究においては、静態型は動態型に席を明け渡し、英語教育においては、その重点は訳読からコミュニケーションへと移行しつつある。こうした動きの背後に、グローバル化や情報化を見て取ることはさほど難しくはないだろう。日本社会を取り巻く社会的な状況が劇的に変化しつつあり、比較文化研究も英語教育も共に、そうした外部の変化に適応を余儀なくされている、ということであろう。旧型が新型に取って代わられるには必然性がある、というわけである。

しかしながら、事情はそれほど単純なのであるか？ 比較文化研究は、静態型から動態型へ交替するだけで、将来の展望が開けるのであろうか？ 訳読を止めてオーラル・コミュニケーションへ教授法の重点を移せば、日本人の英語力は飛躍的に上昇するのだろうか？ どう考えても、問題はさほど容易に解決されるとは思われないのである。比較文化研究者としての私がこれまで観てきた限りでは、動態型の比較文化研究は、『批判のための批判』という陥穽に既に嵌まってしまっているようである。大学英语教師としての私の経験から言えば、オーラル・コミュニケーション重視のカリキュラムが中高に導入されて以降、学部生たちの基礎的な英語力はますます怪しくなるばかりである。あまり性急な断定は出来ないが、どうやら、動態型の比較文化研究にせよ、コミュニケーション重視の英語教育にせよ、現代社会の要求にうまく応えられていないのではあるまいか？

こうした反省を踏まえて以下では、比較文化研究が日本の英語教育に示唆するものは何か、そして、英語（教育）学が比較文化研究に教えるものは何か、という双方向的な視点から議論を展開していみたい。比較文化研究も日本の

英語教育も確固たる方向性を見失っているなかで、両者の間を往来することによって、問題解決への端緒を微力ながらも探ってみたい。

二 比較文化研究から英語教育へ——《訳読》と《コミュニケーション》のイデオロギー

前節の終わりで私は動態型の比較文化研究に対して少々厳しい評価を加えたが、その妥当性や有効性が零だと考えているわけでは決していない。いやそれどころか、それは、《訳読》か《コミュニケーション》かという難題に対して、解決とまではゆかないにせよ、一つの新しい視座を提示してくれる。その視座とは、〈日本の英語教育史の中で、《訳読》も《コミュニケーション》も共にイデオロギーとして機能してきた〉ということになる。この視座を踏まえることによって、《訳読》と《コミュニケーション》の二項対立を《脱臼》させる——あるいは、多少大仰な表現ではあろうが、《脱構築》する——ことが可能になると考えられる。

〈英語教育がイデオロギーである〉とはどういうことだろうか？ ここでは、小林敏宏と音在謙介——《英語教育史学》という新しい分野を提唱している——による最近の議論に拠ってみたい⁽⁷⁾。まず、相互に関係しつつも二つに大別される論点について、私なりの要約を示しておこう。一つは、岡倉由三郎『英語教育』（一九一一年）の位置付けであり、もう一つは、《訳読》と《コミュニケーション》の対立の系譜学的分析である。

小林・音在は、彼らの分析を一種の《歴史社会学》と位置付けることからスタートする。日本の英語教育の歴史的研究としては、英学史のような分野が既にあるが、彼らによれば、そうした先行研究は、「『過去のディテイル（事実）』の収集とカタログ編集作業にのみストイックに専念する」ばかりで、いわば悪しき実証主義に毒されている、

という(8)。それに対して彼らが提唱するのが、『歴史社会学』的な研究、つまり、「近代日本」の「英語教育」を体験した人間の「心性」とその「構図」の変化を、当時の社会の「構造」の変化との関係性の中で明らかにするような立体的な歴史研究である(9)。この『歴史社会学』という視座に立つと、近代日本の英語教育史に固有の問題が次のような点にあることが見えてくる、と彼らは言う。

「日本の英語教育史」研究者が「日本」という用語を用いるとき、それが一九世紀後半から今世紀初頭の「世紀転換期の国際秩序と国民文化形成」の中で創出され「発展」し「維持」され「変容」していった「国民国家」(nation-state)として認識されているかどうかが非常に重要なポイントとなる。」(10)

「日本」の「変容」に応じて「日本人」の「英語」に対する認識が大きく変化しており、その社会的機能の変遷を十分に認識できていないところに現在の英語教育自体とその歴史研究の混乱の原因があるのである。」(11)

この一節は、ある意味では彼らの結論とも見せよう。つまり日本の英語教育の歴史的展開は、『近代の国民国家による文化秩序の形成』という、より大きな文脈の中に捉え直される必要がある、という主張である。さて、ここでさっそく確認しておきたいのは、彼らが『歴史社会学』と呼ぶものは、西川が動態型の比較文化研究と呼ぶものとは重なる、ということである。両者は共に、近代の文化を自律した現象としてではなく、むしろ、それを文化の『外部』＝『政治社会』との関連において捉えようとする。文化事象が社会の中でどのような政治的な動きと繋がっているのか、あるいは、文化事象が如何なるイデオロギーとして機能するのかを分析しようとする視座は、歴史社会学のみならず動態型の比較文化研究が目指すものでもある。

それでは、日本の英語教育は近代日本の《国民文化形成》と具体的にどのような関わってきたのか？ この問題の分析にあたって彼らは、一九一一（明治四四）年に刊行された岡倉由三郎の『英語教育』に着目し、この書物を日本の英語教育史におけるメルクマールと位置付ける。これには二つの理由がある。第一にこの書物は、現在に至るまで日本の英語教育を強力に規定し続けている《教養としての英語》の観念、あるいは、《文法・訳読》重視の方法が成立した事情をよく反映しているからである。このことと関連しつつ第二に、岡倉が英語教育を国語教育とセットにして捉え、言語教育を通して日本語や日本人の観念を創出し定着させるべく努力している様子が、この書物には読み取れるからである。

最初の理由（《訳読》Ⅱ《教養英語》のはじまり）については、岡倉が『英語教育』という語を用いる以前は、『英語教授』という表現が一般的であったことを手がかりにして、彼らは『英語教育』の以前と以後を対比する。《英語教授》とは、全科目の内容をすべて英語で教える、いわゆるダイレクト・メソッドのことで、幕末以来、外国人の教授たちによって実践されてきた。やがて日本側での人材養成が整った明治後期になると、それまで支配的であったダイレクト・メソッドは、日本人の教師が日本語で教えるという教育システムに取って代わられた¹²⁾。英語教育の場合でも、英語で英語を教える方法（ダイレクト・メソッド）ではなく、日本人の教師が日本語を介して英語を教える方法（文法・訳読のメソッド）が採用され、以来、それが英語教育の主流であり続けた。また、文法・訳読のメソッドは読解の教材を主として英米文学の作品に求めたが、そのことによって英語教育は教養教育の場ともなっている。こうした状況の変化を踏まえて岡倉は、『英語教授』ではなく、『英語教育』という表現を用いたのであった。

次に、二番目の理由（《英語教育》は《日本》の観念の創出と関わっていた）について。これは彼らの分析の核心部とも言えようが、残念ながら彼らが示す例証は弱いもので、その意欲的な議論とて理論先行で説得力に欠ける印象

はどうしても拭えない。ともあれ、彼らが論を構築する際に依拠している岡倉の言葉は、次のようなものである。

「【前略】英語科の如き、目下の様から見て、比較的不急なものを加へ、時間と労力とを之に割くは、甚だ愚かなことで、却つて之が為に、國民教育の主要方面が、薄弱に陥る虞がある【中略】。小学校は英語科に時間を割くどころか返つて修身國語歴史等に最も重きを置き國家的觀念の發達に力を置いて外國陣より加えられる欧化の刺戟に抵抗すべきが當然だと思ふ。」⁽¹³⁾

ここで岡倉が言わんとしているのは、英語教育よりも日本語教育や國民教育の方が重要である、ということであろう。そして、この部分を例証として、彼らは「岡倉が『英語教育』を上梓した時、彼は日本の「英語教育」を「國語・國民國家創出過程」のコンテキストの中から提起していた」とか、「岡倉の牽引しようとしていた『英語教育』という思想」も実は「國語・國民國家創出」という同じ目的の中から生起していた」という具合に論を進める⁽¹⁴⁾。

しかしながら、この「國語・國民國家創出」という論点と先の引用とのあいだには、かなりの距離があるのではないだろうか？ 最前、私が理論先行と評したのはこのことである。彼らがするべきであったのは、テキストの引用部を同時代のより広範な社会文化の文脈の中に、より具体的に位置付ける努力であつたように思われる。おそらく彼らは、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムを応用した昨今の文化研究——つまり西川の言う《動態型》の文化論——の成果を意識しているのであろう。そうした文化研究は、近代の文化事象の分析にあたって、近代の國民國家における主体性の確立や國民統合のイデオロギーといった観点を導入し、『文化の政治性』という議論のトレンドを作つた。國民文化のイデオロギー形成に援用された文化事象としては、博覧会、文学の聖典、民俗学、人

類学など多岐にわたる分野が指摘されている¹⁵⁾。こうした少し前の文化批評の動向を踏まえれば、英語教育もまた近代国民の主体形成に関わっていた、という議論は十分に成立するだろうと思われる。ただ、彼らの論法では説得力に欠けることは否めまい。議論の一層の深化を期待したいところである。

次に、最初に大別した二番目の論点(《訳読》vs.《コミュニケーション》の系譜学)に移ろう。実のところ、《訳読》か《コミュニケーション》かという問いは、今に始まったものではなく、幕末明治以来、近代日本において繰り返し提起されてきた。こうしたなかで彼らの議論が新しいのは、繰り返された問いの変遷を歴史的に整理し(正則と変則、実用と教養、コミュニケーションと訳読)、更に、それらを一種の政治文化の現象として位置付け、近代日本の国民国家の形成と変容という巨視的なプロセスの中で解釈したことにある。

近代日本の英語教育論争は、主として三つの時期に活発に行われた。第一期は、一八六〇—一八九〇年で、《国語創出期》と彼らが呼ぶものである。この時期では、《正則》(ダイレクト・メソッド)vs.《変則》(文法・訳読メソッド)という対立のパラダイムで議論が行われ、森有礼の《日本語廃止論》(一八七二年)などに見られるように、正則の教授法が優勢であった。これは、幕末・明治期においては、書き言葉としての近代日本語や日本語による学問の教授体制が確立されておらず、英語と拮抗する形で日本語が知識資源として育っていなかったためである。第二期は、一九一〇—一九四〇年で、《国語発展期》と呼ばれる。この時期になると、《正則》vs.《変則》のパラダイムは、《実用》vs.《教養》のそれに取って変わられる。そして、ここでは一転して教養の立場が有利になってくる。この事情は、先の岡倉の『英語教育』が英語教育と並んで日本語教育の重要性を説いたことなどに見ることが出来る。第三期は、一九七〇年代以降で、《国語変容・再編期》と呼ばれる。ここでは、一連の対比的パラダイムは《コミュニケーション》vs.《訳読》という形で変容されるに至っているのだが、このことについては多言は不要だろう。国際化や

情報化という状況は、二一世紀の日本における日本語や英語の在り方に対して私たちの反省を否応なしに迫っている。このように、日本の英語教育の歴史においては、訳読的なものが優勢になった時期もあれば、コミュニケーション的なものが支持された時期もあった。この英語教育のシーソーがどちらに傾くかは、それぞれのメソッド個々の価値というよりかは、英語教育を取り巻く外部の社会的、政治的な事情によるところが大きい、というわけなのだ。以上のことがらを踏まえて、彼らは全体の議論を次のように締めくくっている。

「英語」か「国語」か、とか「教養」か「実用」か、どちらが「正則」か「変則」か、という問いに対する答えは、そもそも変容する歴史社会社会構造に生じた「必要性」に応じて変化していくものであり、どちらが「本質」的に重要かということではない。日本の国民文化形成にとってはどちらの技術も重要なのである⁽¹⁶⁾。

以上が、小林・音在の論の概要である。

ここで、『イデオロギーとしての英語教育』とも呼ぶべき議論について、私なりの評価を下してみたい。結論から言えば、この議論は一長一短である。

なるほど、昨今の『訳読かコミュニケーションか』という議論が実は非常に近視眼的なものでしかないことを教えてくれるという点で、『イデオロギーとしての英語教育』という議論はインパクトを持つ。イデオロギー批判という手法、あるいは、系譜学や脱構築といった視座は、文化批評の領域では既に過去のものとなりつつある感も強いのだが、日本の英語教育に関しては、そうしたポストモダンニズムの批判的手法が未だに有効である——この論文の発表は二〇〇七年——ことは非常に興味深い。逆に言えば、日本の英語教育関係者の理論的関心はいったどこにあるのだ

ろうか、と訝しく思われもする。おそらくは日本の英語教育に携わる人びとの多くは、生成文法をはじめとする英語学の諸理論には通暁しているはずである。そうした人びとの眼が文化の理論へまで向かないのは一体どうしたことなのか？ 英語学と比較文化研究の理論的接点としては、英語学の語用論の下位分野に《異文化間コミュニケーション論》とか《中間言語用論》のようなものがあるにはある¹⁷⁾。しかし、それらとて私が知る限りでは、言語分析に終始しており、文化論の領野にまでは踏み込んでいない。そうしたなかで小林・音在の議論は、英語教育と比較文化研究（特に《動態型》）を架橋する視座を示してくれた。この功績は実に大きい、と私は思う。これは無い物ねだりかも知れないが、英語教育という領野を媒介にして、英語学のあの高度にソフィスティケートされた諸理論と比較文化研究を更に自覚的につなげてもらいたかった。ちなみに、この方向性は私が次節で行う試論とも関わっている。

こうした貢献を十分に認めた上で、次に論じなくてはならないのは、その物足りなさである。議論の細部における問題点は既に指摘しておいた。だが、それ以上に不満を感じるのは、《訳読かコミュニケーションか》という、日本の英語教育の喫緊の課題について、彼らの議論からは実に曖昧な結論しか得ることが出来ない点である。グローバル化や情報化の進展によって、日本人、日本語、日本文化といった日本をめぐるアイデンティティがゆらぎつつあることは誰もが認識するところであろう。この現状認識に加えて、《訳読かコミュニケーションかという、近代日本の英語教育史で繰り返されたシーソーゲームは社会情勢、あるいは、国民国家の要請に大きく規定されている》という彼らの分析結果を考え併せるならば、日本の英語教育の今後の必然的な趨勢は《コミュニケーション》重視であろうという結論に落ち着いてしまいうのである。しかしこれでは、英語教育のイデオロギーを脱構築するつもりで始まった議論が、結局のところ逆戻りして、コミュニケーションというイデオロギーの鞘に再び納まってしまうことになるのではないか？¹⁸⁾ 脱構築的批評の醍醐味は、行きつ戻りつする二項対立を脱臼させるところにあるのではなかった

か？ 私が抱く疑問は、おおよそこのようにところにある。

同じような不満、あるいは、物足りなさは、動態型の比較文化研究についても当てはまる⁽¹⁹⁾。国民性論を近代の国民国家による国民統合のためのイデオロギーであると批判することはよい。しかし、それで国家が消滅するわけではないし、国民もまた然りであろう。国家や民族といったユニットで生活している人びとの間には、ある特有の文化が共有されていることはどうしても否定できない。そうした生活に根ざした現実を無化して、ハイブリッドだの無国籍だの惑星思考だのと、新しい文化概念を人びとに植えつけようとしたところで、それにはかなりの無理があるのではなからうか？ つまり繰り返すようだが、動態型の比較文化研究による文化論批判は《批判のための批判》に陥っている、ということである。文化についてのポジティブなイメージがつかめないのは、なんともどかしい。

とするならば次に問うべきは、①イデオロギー批判の先に何があるのか（ないのか）のかについて、比較文化研究はどのように考えるのか、②その考えは、日本の英語教育にどのような示唆を与えるのか（与えないのか）、といったことがらであろう。①については、残念ながら、静態型にせよ動態型にせよ、これまでの比較文化研究は明快な答えを持っているわけではなさそうである。ゆえに、②についても、比較文化研究は教えるべきものを何も持っていないようである。ところが非常に興味深いことに、私が最前やや批判的に言及した英語学の領野では、英語教育や比較文化研究の将来に示唆を与えるであろう研究が確実に進められている。ここで視点を反転させて、そうした英語学の成果に眼を向けてみたい。

三 認知意味論から英語教育を経て比較文化研究へ——《レトリック》の示唆するもの

この節では、英語学の新機軸の一つである認知意味論を取り上げて、それが英語教育や比較文化研究に示唆するものを考えたい。認知意味論は、既に言語学の理論の枠を出て、英語教育へ少しずつ応用され始めている⁽²⁰⁾。そうした動向も実に興味深いのだが、私の議論の焦点は、むしろ認知意味論と比較文化研究とのつながりの方に置いてみたい。これには二つの理由がある。第一に私は、日常的に英語教育に携わっているものの、英語学や英語教育（学）を専攻しているわけではなく、むしろ、比較文化の観点から日本の英語教育に発言したいと考えているからである。第二に——より重要なことに——、認知意味論は、これまでのところ英語の分析論に留まっていて、文化の理論としてはあまり注目されていないからである。英語学者たちは、生成文法なり認知意味論なりの新しいアイデアによって、英語という言語の解明に大きな貢献をしてきた。それであっても彼らは、そうした言語理論が持つ哲学的、あるいは、文化論的な広がりにはあまり立ち入らないような感じなのである⁽²¹⁾。かつてソシュールやヤコブソンなどの構造主義言語学は、文化記号論として人文学界で広く応用され、多くの人びとの関心を集めた。そのことを考えれば、認知意味論についても同じような議論の展開を目論んだとしても、さほどの無理はないのではあるまいか。私は、認知意味論を《レトリック論》の一種として捉え、《レトリック》の持つ、いわば《やわらかい真理観》が、文化の多元性をめぐる議論に如何に交差するのかを考えてみたい⁽²²⁾。

*

まず、英語教育と比較文化研究の双方に示唆を与えてくれることが期待される《認知意味論》とは何なのかを、簡単に整理しておきたい。

①総説——「ことばを人間の認知能力の反映とみる立場は決して目新しいものではないが、ソシユールに始まる二〇世紀の言語学の主流はことばをもっぱら言語主体や社会から切り離れた自立的存在として研究してきた。認知科学の進展を背景に、ことばを言語主体の認知能力や身体性との関連から捉え直そうとする動きが「認知言語学」として成立したのは二〇世紀も終わりに近づいてからであった。」²³以下、二〇世紀言語学の主流と二〇世紀末以降の認知意味論（認知言語学）の展開とを対比する形で説明を進めよう。

②言語の恣意性——ソシユールは「言語以前に明瞭に分節された事物や観念の存在を否定し、実体論から関係論へのパラダイム転換」をもたらした。いわゆる《言語の恣意性》——「記号の価値は隣接する他の記号との差異によってしか規定されない」とする考え——がそれである。

③恣意性への疑義——ソシユール言語学の基盤にある《恣意性》の概念は、色彩カテゴリーの研究という実証的な経験科学の視座から反論された。言語によって色彩語彙が異なるという事実は、ソシユールの言う恣意性の例証だと従来は考えられてきた。ところが、《焦点色》という、色彩のカテゴリーの中の最も典型的な例については、言語や話者の多様性を超えて、高度に一致していたという事実が指摘されるに至った。ここにおいて、世界の分節あるいはカテゴリー化は、恣意的に行われるのではなく、「人間が自らの身体的制約の下で環境と相互作用することによって行われる、という視座が開かれた。

④プロトタイプ理論——色彩の研究は、同じ一つのカテゴリーの中においても典型的なものとならないものがあり、カテゴリーの境界はあくまでも曖昧であることを示したが、この視座は拡大されて、《プロトタイプ理論》として展開された。つまり、一つのカテゴリーは「必要十分条件によって規定されるのではなく【中略】【そのカテゴリーの中の】典型的なもの——プロトタイプ (prototype) ——を中心に、それとの類似性によって周辺に拡張していき、それに伴って典型度が落ちてゆく」ように構成されている、とプロトタイプ理論は考える。カテゴリーとは「人間が主体的にプロトタイプを中心に非均質的に創りあげる」ものである。

⑤プロトタイプ理論から認知意味論へ——《外界を意味付けする営み》を《認知》と呼ぶならば、カテゴリー化は、知覚や記憶と同様に、人間の認知能力の重要な一部である。異なったものを同じものとして一つのカテゴリーにまとめることによって、人間は、無限の経験に対して有限のカテゴリーで対処する。このことを踏まえ、人間の認知機能の中で重要な役割を果たす言語に着目することによって認知と言語の関係を説明するべく開拓されたのが、認知意味論である。認知意味論は「言語の在り方を可能な限り一般的な認知能力の観点から」検討しようとする学問である。

⑥概念化——言語と認知の関係はまた、《概念化》とも呼ばれる。認知意味論の考える概念化とは、言葉を媒介にして、さまざまな概念、知識、信念体系——知覚、運動感覚、感情的経験などの心的経験を含めて——へと人間を導くものである。つまり、ことばの《意味》とは《概念化》という認知Ⅱ心的経験に他ならない。

⑦フレーム——《意味》としての《概念化》は、それが主体によってどのように捉えられているか、つまり、「どういうイメージ、感情、運動感覚で捉えられているのか、どういう物理的／言語的コンテキストや社会的価値体系を背景に捉えられているのかを含」んでいる。つまり、「捉え方が違えば意味も違う」のである。このような意味の構築や理解に必要な背景のコンテキスト、知識、価値、信念体系などを《フレーム》あるいは《認知モデル》と呼ぶ。

⑧意味の身体・経験的基盤とイメージ・スキーマ——人間の概念体系の多くは身体・経験的基盤を持つ。このような「環境世界と日常的にかかわり合う経験」に基づく認知モデルのことを《イメージ・スキーマ》と言う。例えば、〈心のなかにしまっておく〉というような表現が示しているのは、《心》という概念は《容器》のイメージ・スキーマによって形成されている、ということである。

⑨メタファー——《イメージ・スキーマ》の問題は、また、《メタファー》のそれでもあるとも言える。人間は、概念を形成するにあたって、意味の身体・経験的基盤に拠りつつ、抽象的なものを具体的なものから理解しようとする。メタファーとは、伝統的な言語観が考えるような、事物の上に張られた単なるレッテルではない。認知意味論は、新しい概念を形成する上で欠かせない認知メカニズムの一つとしてメタファーを重視する。

*

認知意味論は、《訳読》と《コミュニケーション》の間で揺れ続ける日本の英語教育に何を教えてくれるのだろうか。ある論者は、「概念的見地の導入による英語教育の夜明け——和訳偏重主義の構造改革——」という、やや挑発的なタイトルを掲げた論文の中で、次のように述べている。

「ありのままの外世界と記号としての言語を結びつける「認知」のメカニズムを第二言語の学習に応用することで、人間の進化の足跡に即した「一単語内の複数の意味のつながり」及び人間が本来的に所有する原始的なイメージ (primitive image) を複合させることによって得られる「連語表現の意味のからくり」を咀嚼させるこ

とが可能となる。そうすれば、同じ「記憶」の観点であっても従来の機械的な丸暗記（典型的には「英単語・句
「日本語訳」とは一線を画した、学習者の知的欲求を満たし学習意欲の更なる向上に必然的に結びつく「概念
習得」とも言うべき正確性・持続性を持った語彙の獲得を行なうことができる。」⁽²⁴⁾

この論者が提唱しているのは、認知意味論が示す《イメージ・スキーマ》を英語の語彙習得に取り入れることである。その有効性を一つの例に見てみよう。COMEとGOという動詞の使い分けについて、次のような対話（「母親」が「あなた」に呼びかけている）では、どちらを使うのが適切なのか、という問題を考えてみる。

母親：「Dinner is ready.」「夕食ができました。」

あなた：「I am (coming/going) right away.」「今すぐ行きます。」

正解は、「coming」である。

ここで必然的に問題となるのは、日本語と英語の齟齬であろう。英和辞典では、COMEには《来る》、GOには《行く》という訳語が通常は充てられている。それなのに、日本語では「行きます」に対応する英語の表現が、なぜ、GOではなくCOMEなのか、という疑問である。そして、文法・訳読のメソッドは、この問いに対して説得力を持った答えを与えることがおそらく出来ない。訳語（翻訳）に頼る理解の限界がこのようにところに露呈しているのだ。この問題に対して認知意味論は、《イメージ・スキーマ》を援用しながら、次のような説明を与える。COMEという動詞の基本的なイメージにおいて、移動の到達点は話し手／聞き手の存在場所であり、また、GOという動詞のそ

れでは、移動の到達点は話し手／聞き手の非存在場所になっている。この対話の例では、《あなたⅡ話し手》はこれから《母Ⅱ聞き手》のところへ移動することが想定されているのだから、もしGOを使うと、《あなたⅡ話し手》は《母Ⅱ聞き手》のところ以外へ移動することになってしまう。それゆえに、この文ではGOではなくCOMEを使うのが適切である、というわけである。

このように《イメージ・スキーマ》が英語教育の場に適切に導入されるならば、訳読の踏み込めない領域にまで学習者の理解を深めることが可能になってくる。語彙をイメージで捉えることが出来れば、翻訳というプロセスに頼る必要は必ずしもなくなる。翻訳によって生じる意味のズレのような現象が英語の正しい運用を妨げているとするならば、イメージを通したダイレクトな理解によって、そのズレを修正することが出来る。訳読批判論者にとっては、願ったり叶ったりの話であろう。

なるほど、訳読イデオロギーを超越しようとする人びとにとって、《イメージ・スキーマ》の方法は強力な武器になるろう。それであっても、この論者が示しているのは、主として語彙のレヴェルでの理解に過ぎない。複雑な英語の文章を目の前にした時に、語彙の原初的なイメージに頼ることはどれほど有効なのだろうか？ 認知意味論が従来の英文法の体系をどの程度まで書き換えてくれるのかを私たちとしては知りたいところである⁽²⁵⁾。また、日本語と英語の間に意味のズレがあるならば、それを自覚的に学習することによって、二つの言語をより深く理解できるようになるとも考えられようが、訳読批判論者はそのような比較文化的な展望はついぞ持っていないらしい。

ともあれ、認知意味論が英語教育に導入された場合、それはコミュニケーション重視の側に有利に働いて、訳読には専ら否定的に機能するらしいことをここでは確認するに止めたい。

次に、認知意味論は比較文化研究に何を示唆するのだろうか？ 先の整理①～⑨からも分かる通り、認知意味論はまずは言語論として企図されているのだから、それを比較文化研究の領野に応用しようとするならば、認知意味論があえて文化論の領域に関わる理由を明確にしておく必要がある。そこで、認知意味論を一種の《レトリック》論として捉えることが準備作業として必要になってくる。レトリックとは、まずは言語をめぐる実践であるが、それはまた、哲学的な論議でもある。認知意味論と文化論の哲学とを結ぶのは、レトリックが持つ相対主義的な視座である。つまり、言語の相対主義はまた、レトリックを介して、文化の相対主義へと通じている。ここでは、レトリックの言語観と真理観の特徴を、レトリックに反対する立場と対比する形で、描いてみよう。

④ 反レトリックの客観主義——ソクラテス以来、数多くの哲学者たちは、レトリックはベテンであり、真理探究の技術ではない」として、レトリックを斥けてきた。彼らは一致して「レトリックが扱う言語の形態——弁論とか比喩とか——は、言語の本来のあり方から見れば、副次的なものに過ぎない」と考える。彼らにとって、本来の言語は《大文字で書かれた唯一の真理》を語るものであり、そのための手段は《論証＝演繹》である。論証＝演繹が正しく機能するためには、言語はあくまでも一義的でなくてはならない。それゆえに、レトリックの領野で跋扈する言語の多義性は、真理の探究にとっては害毒以外の何物でもない。このように、レトリックを批判する者たちの真理観＝言語観は、《モノフォニー》的であることを特徴とする。

⑤ レトリックの相対主義——反レトリックの立場とは対照的に、レトリックの真理観＝言語観は、《ポリフォニー》

的である。レトリックを支持する者たちにとつては、真理は、唯一絶対のものではなく、むしろ、いろいろな場面に複数形で存在する相対的な何かである。彼らはまた、人間の世界は不透明であり、真理は蓋然的にしか語れないことをよく自覚している。そうした人間の世界においては、事物の論証に有効なのは、絶対に確実な前提から出発する《演繹》ではなく、多くの人がとが概ね正しいと判断するところ（共通感覚）に依拠する《帰納》や《類推》である、とも彼らは考える。

◎ レトリックの真理観と言語観の関係——こうした相対的な真理観は、レトリックの言語観に根ざしている。レトリックが扱う言語の形態——暗示、比喩、文彩など——は、言語の一義性を根本的に拒む、多義的でポリフォニックな性格を持つからである。このことは、真理を語るという行為が常に《状況》に規定されている、ということにも繋がっている。モノフォニックな《真理＝言語》観が支配する場面では、真理は常に真理であるゆえに、真理を「誰が、いつ、どこで、誰に」語ったのか、というような状況的な要因は問題にならない。これに対して、ポリフォニックな《真理＝言語》観においては、《語る》という行為は、常に「誰かが、誰かに向かって、ある特定の意図を持って」語る、あくまでも状況に即したものである。つまり、レトリックの実践はコミュニケーションの行為である、とも言える。

ここで、レトリックの言語観と真理観に関する①～③の整理と、認知意味論に関する④～⑨のそれを突き合せて、《レトリックとしての認知意味論》という視座を確認しておこう。

大局的に言えば、西洋の思想史において繰り返されてきた《反レトリック》と《レトリック》の対立は、二〇世紀においては、ソシユールに始まる主流派の言語学と、それを批判しつつ登場した《認知意味論》との間で再現されて

いると考えられる。ソシユール言語学にせよ、生成文法にせよ、二〇世紀言語学の主流学派は、言語を《言語記号のシステム》という自律的なものと捉え、言語を操る主体や言語を取り巻く社会環境と言語自体とを切り離す傾向を強く持つ。そうした傾向を背景にして、主流の言語学を代表する概念——ソシユールの《恣意性》やチョムスキーの《モジュール》など——はまず何よりも科学的であり、客観主義的であることを特徴とする。これに対して認知意味論は、言語を操る人間という主体に備わった認知能力や身体性という視座から言語を捉えようとする。そして、この人間中心主義的な視座に立てば、言葉の意味は固定したものではあり得ない。ある事物がある人間が言語を通して捉え意味付けを行う場合、捉える人間が異なれば、あるいは、その捉える人間を取り巻く環境が異なれば、それに応じて捉え方も異なってくるし、更に、捉え方が違えば、必然的に意味も異なるからである。こうした意味付けの多様性は、伝統的なレトリックの相対主義的な真理観に繋がっている。意味や真理は唯一絶対ではない。意味や真理は、誰が何をどのように捉えたのか、あるいは、語ったのか、という具体的な状況と切り離せないことを自覚している点で、レトリックと認知意味論は、相対主義という視座を共有している。

ここで準備作業をひとまず終えて、当初の問いに戻ってみたい。認知意味論を含めたレトリック論の持つ、いわば柔らかな真理観や言語観は、比較文化研究に何を示唆するのだろうか？ 端的に言えば、《レトリックとしての認知意味論》は、動態型によって批判されてきた、いわゆる静態型の比較文化研究を復権させる手がかりになろう。もっとも、この復権の作業にあたって、私は少し古いタイプの文化論をそのまま再生しようとするわけではない。また、動態型によって押された《静態》という烙印をそのまま使い続けることにも非常なる違和感がある。そこで以下では、静態型という語ではなく、《文化的特性の類型論》あるいは《文化的差異の比較論》という表現によって、比較文化研究の可能性を探ってみたい。こうした形態の文化論と認知意味論とのつながりとは何か？

まず、『文化的特性の類型論』のアクチュアリーを問うことから始めよう。文化の特徴を国民や民族といった集団に即して取り出す作業の妥当性とは何なのか？

動態型の比較文化研究からの批判によれば、静態型のそれが持つ最大の難点は、『本質主義』essentialismにあるという²⁶。国民性論などの文化論は、文化の類型的な特徴に関する言説を国民や民族という枠組みに即して作り提示することによって、その枠組みの内部において均質かつ不変化な文化の『本質』が具体的に成立しているかのような幻想を作り出している、と動態型は批判する。また、こうした静態的な文化のイメージは、既存の枠組みに納まらないマイノリティーの存在を隠蔽し、その多様な存在を抑圧することにもつながる、という批判もある。

例えば、『菊と刀』（一九四六年）のような文化類型論は、その難点を典型的に示している²⁷。著者のルース・ベネディクトは、日本の文化の特徴を『義理と恩』という、一種の互酬関係に突き止めた。そして、こうした理念型の文化モデルは、近年では専ら批判の対象である。現実としては、すべての日本人が『義理と恩』のような封建的な人間関係の中に生きていたわけではないし、そうした階層性として、長い日本の歴史の中で主として近世以降に形成されたものに過ぎない。動態型の比較文化研究は、こうした難点を『本質主義』と呼び批判する。

しかしながら、『文化的特性の類型論』を『レトリック』としての認知意味論²⁸という視座から眺めてみるならば、これとはかなり違った見解が出てきそうである。文化とは個人的のみならず集合的な営為であることを踏まえるならば、ある集団に属する人びとのあいだで共有されている、最も『それらしい』文化現象にまず着目することは、きわめて人間的な行為と言える。ここでは、プロトタイプ論を援用してみよう。プロトタイプ論によれば、人間の認知能力においては、典型的なものとしてのプロトタイプが重要な役割を果たしている。そして、プロトタイプ論が示した色彩や言語についての知見はまた、文化一般にもまた当てはまるものではあるまいか。事物がある一つのカテゴリーで

括られた場合であっても、そのカテゴリーの内部では、幅をもった様々な個体が存在しているものだが、その中から概ね最大公約数的な特性を取り出したとしても、それは誤謬でもなければ恣意的断定でもない。また、最大公約数的なものを中心に据えるからといって、そのことは、中心から遠くにあるものを異物として排除することには必ずしもならない。なぜならば、人間の認知機能そして人間の文化事象は、『らしい』ものから『らしくない』ものへと連続して、いわばアナログ式に構成されているからである。このように発想を転換するならば、多様性を一元化し、マイノリティを疎外・排除するからという理由で最大公約数的な特徴に着目すること貶めるのは、少なからず人間の本性に反した無理な考えなのではないか、と思われてくる。

次に、『文化的差異の比較論』についてはどうだろうか？ 世界には様々な異なった文化が存在することを認め、それらの差異を比較する作業には、どれほどの有効性を認めることが出来るのか？

動態型の比較文化研究の批判によれば、文化の差異を比較する作業もまた誤謬である。なぜならば、『比較』という視座は、自文化と他文化のあいだに線引きを行うことによって、自文化内部のアイデンティティを強化し、排他的なナショナリズムを生み出す機能を持つからである。また対外的にはそれは、文化や人種間のヒエラルキーを構築し、有形無形の人種主義を生み出すからである。

この場合も、『菊と刀』の例が典型的である。『菊と刀』は、日本文化論であると同時に、倫理観念に関する日米間の比較論でもある。それは、日本とアメリカにそれぞれ固有とされる罪悪感の特性を『恥の文化』と『罪の文化』にそれぞれ措定し、それらを比較対照している。そして、そうした作業は暗黙のうちに西洋優位の人種主義とナショナリズムに転化している、とする批判がある⁽²⁸⁾。これが近年の有力な『菊と刀』読解であるのだが、それはまた、動態型の比較文化研究の典型的な語り口ともなっている。私が『批判のための批判』と言っているのも、この類の言説

である。

だが、《レトリックとしての認知意味論》を参照してみると、またもや、動態型の批判理論とは異なった見解が浮かび上がってくる。文化的な差異を比較する作業は、ナショナリズムや人種主義を生み出す元凶ではなく、むしろ、異文化間の相互理解に資するものである。ここでは、メタファアの理論が役立つだろう。認知意味論は、メタファアを修辭の技法のみならず人間の認知の基本的な方法の一つとして、より広範に捉えている。人間は、抽象的な概念の形成にあたって、常に具体的、身体的なものから出発するのだが、その具体と抽象の間を媒介するものがメタファアに他ならない。メタファアを通した概念形成は人間に共通する普遍的な認知の方法である。と同時に、メタファアの内実は、個別の文化に依じて様々に異なるということにも留意されなくてはならない。人間を取り巻く環境が異なれば、その環境に規定された人間の身体の状態も変化する、人間が環境に働きかける機能であるメタファアもまた違った内実を持つようになることは、メタファアの機能と特性を考えれば、けだし当然であろう。ここに確認できるのは、メタファアの持つ《普遍性》と《個別性》である。そして、この普遍と個別の二元性とその両者の共存こそが、メタファアをして異文化間のコミュニケーションにおける相互理解を可能にしているものだ、と考えられる。

異なった文化的特性を持った人びとどうしが接触した時、互いをすぐさま理解することは難しい。相互理解に向けた一つのヒントは、コミュニケーションの基底に隠れた人間の認知機能という普遍性にある。認知意味論の教えるところによれば、人間にとって概念の多くは身体的な経験に基づいており、そうした身体的な経験は文化的な差異を越えて、多くの人間たちに共通している。それゆえに、文化事象の表層に露呈している差異から出発して、それらの深層に隠れている普遍性にまで立ち戻ることによって、相互理解のための契機を見つけることが出来るだろう。ここで、メタファアというレトリックの装置が相互理解の媒介役として機能すると考えられる。

このように具体と普遍、差異と本性の間を往復することによって、より高い次元の相互理解に達することこそが、文化を類型的に捉え、それらの差異を比較する意味ではあるまいか。人びとは、差異に直面することで、人間に共通する物の見方や捉え方を知ることが出来る。異文化の理解とは、異文化を新しく知ることであると同時に、また、自文化を深く再認識することでもある。これが、認知意味論をレトリック論として比較文化研究に応用しようとしている私のさしあたっての結論である。

四 おわりに——小括、そして、関連性理論

現代日本の英語教育が直面する問題からスタートし、英語教育と比較文化研究のあいだにパラレルに存在する問題を扱ってきた。比較文化研究と英語教育は、教職科目などでは隣接していながらも、これまで目立った相互交渉はなかったようだが、そうした欠落を埋めるべく、試論的な努力をしてみた。最後に、二つのテーマに触れることで、さしあたっての小括としたい。一つは、『訳読』か『コミュニケーション』か、『コミュニケーション』か、という当初の問題について、この試論全体はどのような答えを出すのかということ。もう一つは、認知意味論と並ぶレトリック論の新機軸である『関連性理論』について。

第一のテーマについて私は、『訳読』か『コミュニケーション』か、『コミュニケーション』か、という二者択一ではなく、『訳読』も『コミュニケーション』も、という二者包含をあえて主張する。この結論に至るまでの議論の流れは、およそ次のようになるか。

私はまず、動態型の比較文化研究が主張する『国民国家における政治文化の脱構築』のような視座を批判して、認

知意味論の示唆を受けながら、『《文化的特性の類型論》や『《文化的差異の比較論》』を擁護した。この議論の構図を英語教育の領野にシフトさせるならば、まず動態型の比較文化研究は、日本近代の英語教育の歴史社会学に相当する。両者の脱構築的、あるいは、系譜学的な手法は、文化批判に収斂するからである。そして、そうした批判の先に何があるのかについては、両者として何か明確なヴィジョンを持っているわけではなさそうなのだが、おそらくは自己と他者のあいだの相互交渉的なコミュニケーションのモデルを考えているらしい点でも、両者は共通している。

とするならば、次に問われるべきは、私が比較文化研究について提示した対案である『《文化的特性の類型論》』や『《文化的差異の比較論》』に相当するものは英語教育の場合は何か、ということであろう。この議論を単純なパッチワークと考えるならば、それは訳読だということになるが、事情はさほど単純ではあるまい。

私の基本的な考えによれば、『《文化的特性の類型論》』や『《文化的差異の比較論》』は、人間、言語、そして、文化をめぐる個別性と普遍性の両者に立脚するものである。それはまた、他者を知り、かつ同時に、自己認識を深める実践である。この考えを日本の英語教育をめぐる議論に適用するならば、訳読は自己や個別性に、また、コミュニケーションは他者や普遍性にそれぞれ関わる理解の様式であると大まかには位置付けられるだろう。訳読は——動態型が示すように——自己の主体性を立ち上げることと表裏一体である²⁹。コミュニケーションとは、自己と他者を結びつける相互交渉の作業であろう——これまた動態型の言う通りである。訳読とは、日本文化が海外文化を受容する際に長年に亘って採用してきた、いわば日本の文化的な伝統に根ざした知的作業であろう。コミュニケーションの要諦とは、言語を媒介にしつつ、言語を成立させているレトリックや認知構造という、人間にとって普遍的な基底部分にまで遡ることであろう。そして、言語や文化の理解において、自己や個別性と他者や普遍性の両者を踏まえることが必要であるならば、日本の英語教育においても、訳読とコミュニケーションの両者を等しく認める姿勢が求められてい

るのではないか、と私は考える。英語自体に即して英語を理解することも必要だが、英語を日本語に訳すことによって、英語と日本語をそれぞれに知り深めることもまた重要なのではないか。これが、『訳読』も『コミュニケーション』も、という私の主張の意味である。この主張とて、まだ抽象的で、英語教育の現場に有効なフィードバックをもたらせる次元にはないが、この基本的な視座を踏まえて、これからも比較文化研究の立場から英語教育に発言できればと私は思っている。

最後に、『関連性理論』について短く触れておきたい。この論文では触れることが出来なかったが、英語学やレトリック研究における新機軸としては、認知意味論の他に、関連性理論が見逃せない。関連性理論とは、「人間の情報処理（認知）は、自分にとって関連ある（relevant）情報に注意を払うようデザインされている」という視座から展開される、認知理論の一種である³⁰。関連性理論は、「聞き手が、発話で用いられた文の意味以上の豊かな情報をいかにして把握できるかを説明する」点において、双方向的なコミュニケーションの理論なのだが、それはまた、「発言解釈を導く糸となるのは「真理」ではなく「関連性」である」と考える点において、「文（発言）」を評価する基準の中心に「真偽」を据えてきた西洋哲学の伝統に対する反逆」となっており、私が（反）哲学的な観点から位置付けたような、レトリックの理論でもある³¹。

関連性理論は、コミュニケーションのモデルを刷新しつつある新知見である。関連性理論によれば、発言とは話し手が聞き手の推論を誘導することにより自分の望む反応を聞き手から引き出すための聞き手（の認知環境）への働きかけであり、また、発言解釈とは話し手に適切にはたらきかけるために話し手の発言を証拠の一つとして聞き手が行う情報処理である。つまり、関連性理論の考えるコミュニケーションとは、「話し手が世界を記述するメッセージを発言のかたちにコード化し、その発言を物理的に聞き手に送り届け、聞き手がそのメッセージを解読する、というプ

ロセス」ではない⁽³²⁾。それはむしろ、「人間が環境【中略】と相互作用しながら生きることの、ある特有な局面」であり、「認知環境の変化を通じた話し手と聞き手の間での行動の調整」である⁽³³⁾。このモデルにおいては、コミュニケーションはあくまでも双方向的に捉えられている。コミュニケーションが双方向的であるとは、いわば当たり前と思われるかも知れない。しかし、従来のコミュニケーションのモデルは、「言いたいことが話し手の側に予めあり、コミュニケーションとはそれを聞き手に伝える作業に過ぎない」とするような、比較的単純な《コード・モデル》の次元に留まっていたこともまた事実なのである。こうした旧来のコミュニケーションのモデルを批判しつつ、関連性理論は、推論のような概念を中心にして、コミュニケーションの概念を塗り替えようとしている。

この簡単な要約からでも容易に想像されるように、関連性理論の提唱するコミュニケーションの新モデルは、英語教育にもダイレクトに影響を持つだろう。未だに英会話の教科書に散見される《オウム返し》の会話練習は、正に《コード・モデル》に基づいているわけだが、英語コミュニケーション重視の英語教育を唱える人びとは、関連性理論のようなアイデアをどのように教室で生かすのかを真剣に考えてもらいたいものである。

また、関連性理論は比較文化研究にも示唆を与えてくれることが期待される。関連性理論は会話の双方向性を主張しているわけだが、この《双方向性》という視座が異文化間の交渉という問題に通じていることを見て取るのは難しくない。また、先にも触れたように、関連性理論を真理観という哲学の視座から眺めてみると、それは一種のレトリック論とも考えられるのだが、レトリックの特徴である相対主義的な視点はまた、関連性理論のそれでもある。これらの点において、認知意味論と同様に、関連性理論もまた、異文化間コミュニケーション論や文化多元主義をはじめとする比較文化研究の諸分野に多くを教えてくれるだろう。

(付記) この論文は、埼玉大学教員免許センターでの更新講習(二〇一〇年八月一八日)のために私が準備した草稿を大幅に書き直したものである。講義に出席された中高の英語教員の皆さまに感謝もうしあげる。特に、認知意味論の研究の現状についてのコメントはたいへん有難く、本稿にも反映させていただいた。

注

- (1) 大田雄三『日本人と英語』(講談社学術文庫、一九九五年)。江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか』(研究社、二〇〇八年)。
- (2) 松本茂・大津由紀雄「論争 これでもいいのだ学校英語」(『朝日新聞』二〇一〇年八月四日)。
- (3) 西川長夫「新しい文化モデルの模索」(竹内実・西川長夫(編)『比較文化キーワード①』サイマル出版会、一九九四年)。
- (4) 西川「新しい文化モデルの模索」九頁。
- (5) 西川「新しい文化モデルの模索」一七頁。
- (6) 寺島隆吉「英語教育が減びるとき」(明石書店、二〇〇九年)。江利川春雄『英語教育のポリティクス』(三友社出版、二〇〇九年)。菅原克也「訳読について」(『東京大学教養学部報』東京大学教養学部、二〇〇九年六月三日)。
- (7) 小林敏宏・音在謙介「英語教育史学」原論のすすめー英語教育史研究の現状分析と今後の展開への提言ー(拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』一七、二〇〇七年)。この論文の続きには次のようなものがある。小林敏宏・音在謙介『英語教育』という思想ー『英学』パラダイム変換期の国民的言語文化の形成ー(拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』二一、二〇〇九年)。

- (8) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」三六頁。
- (9) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」四五頁。
- (10) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」四六頁。なお、原文のギリシャ数字は漢数字に直してある。
- (11) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」四八頁。
- (12) 一つの例としては、東京帝国大学の英文学の教授者が、一九〇三（明治三六）年に、ラフカディオ・ハーンから夏目漱石へと代わったことが挙げられよう。
- (13) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」五二頁。原文の出典は次の通り。岡倉由三郎『英語教育』（研究社、一九一一年）一三五頁。
- (14) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」五二―三頁。
- (15) 例えば、次のような一連の書物がこの問題を扱っている。吉見俊哉『博覧会の政治学』（中公新書、一九九二年）。ハルオ・シラネ、鈴木登美（編）『創造された古典』（新曜社、一九九九年）。村井紀『南島イデオロギーの発生』（岩波現代文庫、二〇〇四年）。山路勝彦、田中雅一（編）『植民地主義と人類学』（関西学院大学出版会、二〇〇七年）。
- (16) 佐藤・音在「英語教育史学」原論のすすめ」五八頁。
- (17) これらの分野に関しては、次のような書物を参照されたい。小阪貴志『異文化コミュニケーションのA to Z』（研究社、二〇〇七年）。清水崇文『中間言語用論概論』（スリーエーネットワーク、二〇〇九年）。
- (18) 日本における英会話のイデオロギー性については、次のようなものが詳しい。ダグラス・ラミス『イデオロギーとしての英会話』（斎藤靖子訳、晶文社、一九七六年）。Brian J. McVeigh, "Self-Orientalism Through Occidentalism: How "English" and "Foreigners" Nationalize Japanese Students" in *Japanese Higher Education as Myth* (Armonk: ME. Sharpe 2002). Philip Seargeant, "English in Japan: The Current Shape of the Debate," in *The Idea of English in Japan* (Bristol: Multilingual Matters, 2009).
- (19) この点については、私も別の場所において詳しく論じたことがある。Kazuhisa Yoshida, "Two Readings of the Chrysanthemum"

mum and the Sword in the Contemporary Perspective of the Comparative Studies of Culture." in *Bulletin of the Institute of Humanities & Social Sciences*, no. 72, Nihon University, 2007. Kazuhisa Yoshida, "The Predicament of Speaking about Cultural Differences: Two Readings of Watsuji Tetsuro's Cultural Typology and the Context of American Multiculturalism," in *Hitotsubashi Review of Arts & Sciences*, no. 3, Hitotsubashi University, 2009.

- (20) 管見に入った限りでは、これまでの主要な達成としては、次のようなものが挙げられる。上野義和(編)『認知意味論の諸相』(松柏社、二〇〇二年)。上野義和、福森雅史、森山智浩、李潤玉著『英語教師のための効果的語彙指導法、認知言語学的アプローチ』(英宝社、二〇〇六年)。上野義和『英語教育における論理と実践―認知言語学の導入とその有用性』(英宝社、二〇〇七年)。田中茂範『認知意味論』(三友社出版、一九九〇年)。田中茂範、佐藤芳明『英語感覚が身につく実践的指導』(大修館書店、二〇〇六年)。佐藤芳明、田中茂範『レキシカル・グラマーへの招待』(開拓社、二〇〇九年)。

- (21) 認知意味論を哲学や文化論に応用した成果としては、次のようなものが管見に入った。有馬道子『パースの思想』(岩波書店、二〇〇一年)。青木克仁『認知意味論の哲学 コミュニケーションの身体的基礎』(大学教育出版、二〇〇二年)。杉本孝司『認知言語学と異文化理解』(細谷昌志(編)『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇六年)。

- (22) この点については、次の二つの文献に示唆を受けた。菅野盾樹『新修辞学、反〈哲学的〉考察』(世織書房、二〇〇三年)。菅野盾樹『総括と展望―レトリック論の将来に向けて―』(菅野(編)『レトリック論を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年)。

- (23) 野村益寛『認知言語学』(辻幸夫(編)『ことばの認知科学事典』大修館書店、二〇〇一年)。以下、①～⑨の要約における引用も同書に拠る。なお、原文のギリシャ数字は漢数字に直してある。

- (24) 上野『英語教育における論理と実践』三九〇頁。

- (25) 一部の人は、《レキシカル・グラマー》によって、語彙から文法へと展開を図っているようだ(佐藤・田中『レキシカル・グラマーへの招待』)。

- (26) ポストコロニアリズムなどが提起する『本質主義』への批判と、それに対する再批判については、例えば、次のような文献に詳しい言及がある。Terry Eagleton, *The Illusions of Postmodernism* (Oxford: Blackwell, 1996). 日本語訳は、テリー・イーグルトン『ポストモダン主義の幻想』(森田典正訳、大月書店、一九九八年)。
- (27) リサ・ヨネヤマ(米山リサ)「文化という罪―「多文化主義」の問題点と人類的知」(『岩波講座 文化人類学』一三巻、岩波書店、一九八八年)。Lisa Yoneyama, "Habit of Knowing Cultural Differences: *Chrysanthemum and the Sword* in the U.S. Liberal Multiculturalism," in *Topoi* 18 (1999): 71-80.
- (28) 詳細については、例えば、注(19)に挙げた文献などを見られたい。
- (29) 酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』(岩波書店、一九九七年)。
- (30) 西山祐司「関連性理論」(『ことばの認知科学事典』二九五頁)。
- (31) 能川元一「関連性理論からのアプローチ」(『レトリック論を学ぶ人のために』一五六頁)。
- (32) 能川「関連性理論からのアプローチ」一五二―三頁。
- (33) 能川「関連性理論からのアプローチ」一五二―三頁。

